

コサックの国・ウクライナは屈しない 先川 信一郎



今年3月中旬から1か月間ポーランド経由でウクライナを訪れた。そして、この戦争の目的が「文化の破壊」だと実感した。ロシア軍は民間人を殺戮し、略奪し、住み慣れた家や農地を燃やすだけではない。人々を恐怖のどん底に突き落とし、ロシア帝国やソビエト連邦時代のように属国化を狙っていた。つまり、ウクライナ人のアイデンティティを消し去ろうというのがこの戦争の本質だ。だが自由の民・コサックの伝統を受け継ぐ人々は勇敢だった。

「虎が庭にやって来た」

——ワルシャワ近代美術館で開催中のウクライナの画家「マリア・プリマチェンコ展」はこう名付けられた。これは戦争の実相をうまく表わしている。平和に暮らしていたウクライナ人からすればそんな感覚だろう。

日本人の多くが「非戦」を訴えているが、目の前で家族を殺されたらどうするのか。ロシアは国際法を犯し、核の恫喝を繰り返し、プーチン大統領には国際刑事裁判所(ICC)から逮捕状が出ている。ウクライナの子どもたちを「ロシア化」するため、2万人以上を拉致したのは、戦争犯罪以外のなにものでもない。

市民のソフトパワーを知ろうと、私はクラクフから列車でウクライナ西部のリヴィウに向かった。最初に取材したのは国民的詩人でPEN ウクライナ副会長のオスタップ・スリヴィンスキーさん(45)=上写真=だ。詩人は市民や時代の声を敏感に伝える。



「われわれには戦うしか選択肢がない。戦いをやめれば全てを失う。領土の20%だけではなく主権や安全保障まで失う。だから武器を捨てて和平交渉を始めようとは言えない」

ホロドモール(大飢饉)やスターリンによる大粛清を知るウクライナ人にはソ連時代の恐怖の記憶がある。これは日ソ中立条約の破棄やシベリア抑留を知る日本人にもわかる。

次に首都キーウで会った気鋭の現代アーティスト、ニキータ・カダンさん(42)=下写真=は、ソ連時代と向き合いながら、戦争の不条理さと怒りを作品に込めていた。彼は芸術文化の最高賞であるタラス・シェフチェンコ国家賞を受賞している。



驚いたのは、カダンさんが開戦直後、キーウの地下シェルターで1か月

間寝泊まりしながら美術展を開いたことだ。彼のアトリエにはギリシア神話の英雄アガメムノンとゴミ袋の作品があったので、何の暗喩か尋ねると、「ウクライナ軍はロシア兵の遺体を引き取るよう敵に伝えた。すると送られてきたのは黒いゴミ袋だった。ゴミ袋は死んだ侵略者の象徴。アガメムノンは植民地化して支配しようとする戦士の王だ」と解説してくれた。

音楽は私の武器

では、音楽家の受け止め方はどうか。国立フィルハーモニー交響楽団の音楽監督・指揮者を務めるミコラ・ジャジューラさん(62)=下写真=は「音楽は私の武器だ」と明快だ。そのうえで「毎日、きょうが最後だと思って演奏している」と述べ、戦時下での覚悟を語った。ジャジューラさんは昨年12月、キタラでも演奏している。私はキーウの国立歌劇場で彼が指揮するプッチーニのオペラ「トスカ」を鑑賞したが、1300の席は満員だった。



数日後、国際的なベストセラー『ペンギンの憂鬱』(1996年)の著者として知られるアンドレイ・クルコフさん(63)を訪ねた。「私たちの文化は人々の尊厳を守る働きをする。それは人間の魂を守る『目に見えない鎧』である」と、文化の重要性を指摘した。



帰路、クラクフのヤギウエオ大学東スラブ研究所で、プシェミスワフ・トマネク副所長=左写真中=にも話を聞くことができた。「プーチンの狙いはロシア帝国、ソ連邦を再現することだ。ウクライナを破壊し植民地化し、ロシア化して人々を隷属させようとしている。侵略された側は戦うしか選択肢がない」と、ウクライナの人々と同じ意見だった。

帰国後、ルポを『週刊金曜日』に連載したが、読者の中には「マイダン革命は民族派による自作自演」「ドンバスの停戦を巡るミンスク合意を破ったのはウクライナだ」「ウクライナが挑発したのが悪い。降伏すれば戦争は終わる」と主張する人たちがいた。話とし

では面白いが、ファクトではない。

中には「オタワ大学のイヴァン・カチャノフスキーの論文を読め」という人までいた。トマネク副所長らに確認すると、親ロシア派のカチャノフスキーは、反

証があるにもかかわらず、捏造論文を拡散するところでもない陰謀論者だという。ロシアのプロパガンダにはくれぐれも気を付けたい。

(さきかわ・しんいちろう、ジャーナリスト、本会会員)

グラジナ・バツェヴィチのピアノ・ソナタ第1番 ～日本初演へ～

徳田 貴子

昨年『現代ポーランド音楽の100年～シマノフスキからペンデレツキまで』（グヴィズダランカ著）が出版され、POLE112号で高橋健一郎先生が紹介されたので、ショパン以降の現代ポーランド音楽に興味を持った方も増えたことだろう。



ポーランド音楽におけるファーストレディ

この本の中では、女性作曲家として成功したグラジナ・バツェヴィチ (Grażyna Bacewicz, 1909～69) がしばしば取り上げられている。ワルシャワの国立高等音楽学校(現ショパン音楽大学)教授にまで上り詰め、ポーランド作曲家連合(Polish Composers' Union)の副会長を務め「ポーランド音楽におけるファーストレディ」と称された彼女の作品に興味を持った方もいらっしゃるかもしれない。

彼女のピアノ作品としては、1953年に作曲されたピアノ・ソナタ第2番が有名である。この作品は不安定な調性の中でも明確に主張がある第1楽章、ポーランド民謡を思い起こさせる第2楽章、ポーランドの踊り、オベレックに乗せて駆け抜ける第3楽章からなる。常に不安定な雰囲気纏っているこの曲は、当時のポーランド音楽の世相を反映しているといえよう。1949～53年まで作曲家たちはソ連の提唱する「社会主義リアリズム」の教条のもと、より大衆にわかりやすくポーランド的な音楽を作曲するよう強制されていた。この社会主義リアリズムの統制を意識しつつも、第2番では明らかに反抗した表現が展開されている。彼女自身の言葉を借りれば、石に「彫刻」するかのよう、1音たりとも無駄なく意味を持った本作品は、現在、世界的にも注目が高まっている。

幻のピアノ・ソナタ第1番

一方、ソナタ第1番はあまり世に知られていない。というより、第1番は2022年まで未出版で、幻の作品だった。作曲された1949年から72年の時を経て、一昨年ようやく世に送り出されたのである。第1番は、統制を超えてより自由に表現しようとした第2番とは対照的で、伝統的な形式に則って作曲されており、調性もより明確で親しみやすい。ポーランドの踊りのリズムやポーランドらしい音程を含む旋律が大きなスケールで表現され、大衆にわかりやす

い音楽になっている。1949年は社会主義リアリズムの教条が作曲家に課された最初の年なので、バツェヴィチもそれを意識したのだろう。

けれども、第1番の表現がそれだけに尽きるとはいえない。第2番において際立つことになる「モーターのような」書法や「遠近感を感じさせる」書法は第1番でも用いられており、彼女の個性が感じられる。また、特徴的な書法を用いて社会主義リアリズムに歯向かっていくような主張は、実は第1番でもなされている。だが、その主張は長続きせず、結果的に伝統的な形式に収まっている。その過程は悔しさを感じさせ、結果としてこの曲にしか存在しない美しさを作り出している。

私は大学院博士課程で、学位論文のテーマとしてバツェヴィチの作品を研究した。その過程でソナタ第1番の原稿がポーランド国立図書館に眠っているらしいことを知り、幻の第1番の存在を知った。楽譜のデータを入手し実際に自分で弾いてみて、第2番とは違う美しさやスケルツォ的なキャラクターがある第1番に魅せられた。

日本初演へ



このたび、紆余曲折を経て第1番が出版され、公的に演奏できるようになったので、このソナタ第1番を、第2番とともに10月25日の札幌市民劇場公演にて演奏する予定である。第1番は日本初演となる。

= G. Bacewicz = 写真家 Andrzej Zborski,
ポーランド作曲家連合コレクションより

多くの方々に、幻だった作品をぜひ聞いていただき、困難な時代にも個性を持って創作活動を続けた作曲家がいたことを知っていただきたい。

次号では、グラジナ・バツェヴィチの生涯を辿る予定である。(とくだ・たかこ、ピアニスト、本会会員)